

## 第4回 有田町総合計画審議会（会議概要）

日 時：平成29年4月19日（水）14：00～15：30

場 所：有田町役場第4・5会議室

出席者：【委員14名】岩崎数馬、原田一宏、今泉正子、福島清人、深川祐次、  
川内文昭、川尻敦子、道津功、松尾利興、山口睦、久家郁子、  
王寺直子、徳永純宏、富吉賢太郎

【事務局4名】木寺寿、福山浩樹、川久保哲、志賀修

【欠席7名】久保田均、岩永康則、庄山嘉、岩谷綾子、樋渡毅彦、淵上弘徳、  
小坂智子 ※敬称略

### 1 開 会

木寺：最初に、今回4回目を迎えます審議会につきましては、4月から各組織のメンバーのかたが交代されており、別紙名簿のほうに書いておりますとおり、2号委員の有田町総区長会会長のほうに4月から福島清人会長が就任されておりますので、本日からご出席いただいております。なお、有田町消防団の団長が山口団長から淵上弘徳団長に交代されておりますが、今日は諸事情により欠席となっております。本審議会の会長を岩崎会長にお勤めいただいております。これまで副会長を総区長会会長の岩永会長にお願いしておりました。今回、福島会長のほうに総区長会会長が交代されておりますので、そのまま、総区長会会長で副会長を引き継いでお願いさせていただくことで、皆様のご了承をいただけますでしょうか。

（一同拍手）

### 2. 会長挨拶

岩崎：課長からありましたが、名簿を見ていただきますと、初めてのかたもいらっしゃいますので、自己紹介をしておきますが、岩崎数馬といいます。初回の会議で会長をやれということで、仰せつかって今まで来ておりますが、最後までどうなるのかなと思いつながら、今日は4回目を数えることとなりました。本当に皆様方に感謝したいと思います。初めてのかたもいらっしゃいますので、今までの流れをお話させていただきたいと思いますが、9月に第1回目を開催しまして、初顔合わせみたいな感じの会合でしたが、審議会の趣旨などだったかと思えます。年が明けて2回目を1月に、3回目を年度末のぎりぎりの時期に開催をして、今日の資料1の表紙にありますように、将来像というところの「ひとつつながり ひとつどう 世界に誇れるまち 有田」ということで、皆さんと審議をして決定をし

たところですが。今日は、議事の中にもありますように、基本構想案について全般的な皆さんの忌憚のない意見を出し合いながら、ほぼ形として作り上げていければなど考えております。今ですね、パブリックコメントとして、町のホームページのほうでも、4月17日から5月16日までの1カ月間ということで出されているようですが、その間に町民の皆さん方のご意見も入ってこようかと思っておりますので、それを踏まえて5回目の5月の下旬くらいになろうかという話ですが、そこで、基本構想を決定するという運びになるかと思っております。ご審議のかたをよろしくお願ひしたいと思ひます。

### 3 議 事

岩崎：福島総区長会会長は10年前の総合計画にも関わってこられていまして、力強い副会長さんを迎えることになり、喜ばしく思っております。

#### (1) 第2次有田町総合計画基本構想案について

志賀：(資料1に沿って説明)

岩崎：基本構想の中の、前回は将来像、それから基本目標の住民参画・協働というなかで、かなりこの「おせっかい」というところに議論があったところですが、今日は主に18ページ以降の基本目標の中の福祉、健康、医療、それから生活環境基盤、産業振興・観光、文化・教育、このあたりについて、委員の皆さんのそれぞれの立場、それぞれの思いがあられると、思いますので、よろしくお願ひします。

川内：その前に質問をいいですか。5ページの最初のところですが、少子高齢化がすすむことになりましてと限定してあるのですが、限定していることに対して、今後また増やすという施策があるかと思うのですが、こうやって限定していいのかなど。例えば予測されるということであればいいと思うのだけど、この文章になると確実にそうなるよということを意味していて、その中で人口減少が進むよという文言があるので、ちょっと気にかかったものだから、どうかなと思ひます。

岩崎：目標人口としては、15ページに出ているようですが。

川内：全国平均を上回るペースで減少するとありますが。そういうことが予想されるということであればいいのですが。

岩崎：減ることには間違いないということですよ。

川内：間違いはないけど、限定されていることに疑問があるわけです。

木寺：この文書の流れとしまして、上の国立社会保障人口問題研究所というのが2010年までの傾向をもとに人口減少対策をなにも打たなかった場合として、推計をしております。16ページのグラフの下の数値が、社人研が推計した推計値にな

っています。その社人研の推計によると、2060年、45年後に1万1千人まで減少していくという推計が出ております。文書の表現としておっしゃられたとおり、この文を読む限りでは、社人研の推計をひっばって表現しているとはなかなか読みにくい点もあるかと思しますので、その点はちょっと表現を修正したいと思えます。

富吉：川内委員が言われたように、ここに本町においてもこのままではとか、ちょっと一言入れとけばいいということですよ。そうなるだろうと思うけれども。文書で限定してしまうと展望もやっているしという、このままでは、というそれだけでいいのじゃないですか。

深川：4回目ということですが、私は初めて出席しました。昼間はどうしても本業があり申し訳ありません。そこで、ちょっと質問ですが、これは、大まかに言えばこれからやっということですよ。これから目指す10年計画ですよ。すでにできているものじゃないわけですよ。よく分かるのですが、18ページの福祉・保健・医療に関するところで、一番最後に「情報発信の強化や交流・相談の場の更なる充実を図ります」とあり、更なる言うことは、今現在何かしらの基本があるわけですが、それは具体的にどういったものですか。

木寺：一つは子育て支援関係で言いますと、子ども子育て支援計画によって住民環境課のほうで進めています。そういったものを、推進していくために情報の発信の強化というものを今までにない形で取り組んでいく必要があると考えています。

深川：今までの情報発信といたらどういった形でされていますか。町のホームページとかに限られていますか。

木寺：庁内各課の取組はもちろん、町のホームページですね。最近の動きとしては、移住支援のポータルサイトなどを設けておりますが、その中で移住してもらうためのサイトとして教育や子育てといった情報提供を行っております。そういった、子ども子育て関係を行っているセクションだけで、情報を発信していくということではなくて、町全体としてトータル的に、移住を検討してもらうための子育て支援であったり、教育の充実であったりというところもありますので、そのようないろいろな手段を使つての情報発信ということも一つあります。

深川：相談の場とありますがどういったところに行けば相談ができるのですか

木寺：現在、町に子育て支援センターというものはありません。住民環境課や健康福祉課のほうで子育て支援センターの向けた検討は進めています。実際、子育てのサークルというものも具体的には町内にはございません。そういったサークルなどを一つでも二つでも増やしていくとか、べんじゃらきつずなど就学になった子たちを支援していくような場はいくつかありますが、未就学児の子育て、お母さん方の相談の場や交流の場といったものが、子育て支援センターといった場で行っていくべきではないかというふうに思っておりますので、そこの検討をすすめて

いるところですよ。

深川：まずはそれを作らないといけないということですね。

岩崎：地域包括ケア体制というのは国が発進したばかりという形ですよ。構図としてはですね。それぞれの施設、コミュニティ、公民館あたりを開放したり、年配のかたのためのサロンや憩いの場に提案することなどは、社協あたりで企画、スタートしつつあるみたいですね。そんなところの体制を作っていくとくことですか。

木寺：今年度から介護予防に関する事業取組というものがスタートしております。在宅ケアや在宅看護といった在宅のほうにシフトしていくような、地域で運営していくような体制を目指すということで、ボランティア的な要素も含めたところでの運営というところを検討、実施していく取組が今年度から始まっているところですよ。

岩崎：それを発信しないといけないということで、最後に書いてあるということですか。

木寺：それには限らないのですが。

深川：何年前かにべんじゃらキッズをやっているときに、有田町は高齢者には充実している中で、その当時の若いお母さんたちが言うには、小さいお子さんに対してのあれが全然ないということで、ああいう NPO をやり始めたのですが、それは少しずつ、徐々に改善しつつあるのですかね。

王寺：このところの文章が割りと簡単に書いてあるというので、皆さんご質問されていると思うのですが、まずは地域包括ケアとは何なのかということが分からないと思っただけかとか、子育てについても、ただいきいきと子どもが豊かに育つというような抽象的な言葉で書いてあるので、これだと、有田町独自としてどんなことを目指しているのかということが分かってもらえないので、そういう質問なのかなと思うのです。まず、地域包括ケアというのは、今厚労省を中心に、社会全体で子育てを担うというような形で、なおかつそれが官民産がネットワークを作り、いろいろな形でその一つ一つの活動がネットワークを作りつなげあって包括的に子どもたちを支えあう、子育てをしている親たちを支えあうというような方向性で、今までは点だっただけのものが、点と点がつなげあって、面で支えるというものが包括的ケアの意味だと私は理解しておりますので、このところを、例えば今ある、べんじゃらもあれば、各保育所では一時預かりや延長保育など、子育てに一生懸命充実させながら就労しなければならない親たちのためにいろいろな形でやっているわけなのですよね。それを、一つの園だけではなかなかできなくて、これが産が、例えば香蘭社が従業員のワークライフバランスを考えて男女共同参画のために、女性が子どもが小さいときには、残業させないとか、いろいろな形で就労に取り組んでいくというふうに、希望としてはそういうのを目的にしているのですよとかいうように、ただ、行政だけが努力しただけでは

できない時代なのですよ。ですから、こういう目標の中には、やはり官民産が協調しながらと書くのであれば、それを具体的に、就労支援。もう一つ福祉の面で欠けているのは、要保護児童対策の委員長でもあるのですが、佐賀県ではこの計画を0歳から30歳までと位置づけたわけなのです。それはなぜかと言うと、ニートの問題がありまして、それから虐待、いろいろな形でニートのときには、就労、産が管轄してくるわけなのです。そういう人たちをどうやって社会復帰させるかというような問題まで含めて、計画を立てていくというような形で取り組みたいということを目指していたわけなのです。ただ、有田町ではそのニートの問題よりも、虐待とか要支援を必要とする子どもたち、それから学校へ行けない子どもたちなどが、問題だということで、教育委員会のほうでもいろいろそういう情報をお持ちだと思いますので、それをあわせながら、ここに載せていて、例えばもっとみんなで支えあうまちへと、詳しく載せていくことが必要ではないのかなと、ぱっと読んで思いまして、皆さんからの発言、質問の中でもそこを感じたので、そこらへんを詳しく、有田町として独特なものをどう目指していくのだということの説明すれば問題がたくさん、先ほど言いましたように放課後児童クラブの問題とか引きこもり、不登校の問題とか虐待の問題とかも含めて、もう一つはここは、安心して子どもを産み、子育てができるまちづくりなのですが、もう一つ欠けているのは、これは結婚、妊娠、出産、子育て、ワンストップでやるというのがもう、日本社会の常識になっていますので、全国各地域でそういうふうに、もっと前の段階から支援をしていくというふうに位置づけられていますので、これは、もう少し前の段階からもっていたほうがいいんじゃないかなというのが私の意見です。

川内：14ページの将来像の中の、安心して住む環境が整っているというところに、「若者が仕事があってもなくても、生活できるまち」とありますが、これがさっきのニートと同じ問題なのだけど、これが具体的に何を意味しているのかが分からないよね。これがやっぱり具体性があるって、仕事があってもなくても生活できるまちとなるのじゃないかなと思うけど、その対策として何なのかと、ちょっとひっかかって、王寺委員と同じような感覚なのですが。

岩崎：この中には、4回行われた住民委員会の中の部分ですよ。

川内：ここで何か出ているはずなのですよ。こういう言葉が出るということは。

久家：有田町に仕事がなくとも、よそに仕事に行くことと考えることなのかによってもだいぶ変わってくると思いますが。有田は生活がしやすいから有田で生活するけど、仕事は佐世保に行くとか、もしそういうことであれば、そういう意味合いもあるかも知らないので、グループわけでいろいろな意見が出てきているはずなので、そこを拾い上げていただいたほうが良いなと思います。

深川：大きな議題で安心して住む環境が整っているとなっているので、有田で働かなく

でも佐世保に行って働く、そういう意味かな。

久家：この18ページに関しては、17ページにある協働という言葉が一つも盛り込まれていなくて、連携するという言葉になっているのですが、一番大前提として協働していくということが書かれるのであれば、この中に一言でも協働という言葉があったほうがいいのではないかと感じます。17ページにも出てきますが、住民活動団体という言葉は一般的な言葉ではないので、これに関する注釈も必要ではないかと思います。普通だったら、市民活動団体だと思います。それを住民活動団体とした理由等があるはずなので、そうであれば有田町としてはこういった団体を市民活動団体ではなく住民活動団体と定義しますというようなものが、一番最初の約束としないと、読んだ人がどういった活動のことを指すのだろうかとなるのではないだろうかと思います。

志賀：住民活動団体については、現行の総合計画でも使わせてもらっている用語です。注釈が足りていない所は、説明不足な点は申し訳ありません。これについては、注釈をつけていく形になります。ちなみに、住民活動団体は現行の計画では、まちづくり、福祉、環境保全、教育、芸術文化、国際協力、国際交流など、住民生活に関わるあらゆる分野で、住民が自発的、継続的に行う活動を住民活動といい、この活動を行う団体のこととなっております。いわば、一般的な定義づけとしてはCSOという表現があり、前回も久家委員がおっしゃったように、市民社会組織という表現になってくるのですが、ちょっと市民社会組織とした場合、有田町内ではあまりに型にはまりすぎるのではないかと、もっと気軽にグループなどを作って活動される団体について、行政として応援していこうという意味も踏まえて、あえて市民社会組織という表現は外させてもらっているところです。

久家：佐賀県が定義している市民社会組織というのであれば、例えば従兄弟会であったり、隣保班であるとか、そういったところまでを包括して定義されていると記憶しているのですが、そこまでは含めないということですか。

木寺：意味合的にはCSOというものが、当然そこまで含んだ組織を表現していることだと思うのですが、志賀が申し上げた内容は、CSOとか市民社会組織という表現が有田の今の現状ですと受け入れてもらえる言葉かどうかというところを判断したときに、住民活動団体のほうがもう少し広く受け入れられるのではないかとこの思いで選択した言葉になっていると思います。

岩崎：17ページについては、前回もかなりの時間を割いて議論した部分ですが、どうでしょうかね。

久家：それを踏まえて、18ページも改良されていけばいいなというのがあって、折角協働というのを前のページで一生懸命書いているにもかかわらず、次のページは協働という言葉ではなく連携という言葉になっています。そうすると、協働ということが本当にされていくのか、連携というもっと緩やかな感じで、一緒に何か

をすとか、住民活動団体と一緒に何かするということに、ただ単に連携と捕らえられかねないので、統一されたほうがいいと思います。

岩崎：先ほど王寺委員が言われた、地域包括ケア体制のところも意味を出す意味でも、久家委員が言われるようにもうちょっと説明を加えるような感じでいいですか。あと、時間もありませんけど、19、20、21も含めてですね、それぞれの立場で出席いただいておりますので、ご意見お願いしたいと思います。

松尾：18ページの3行目ですが、私の立場上、健康寿命を延ばすというのは非常に大事なところですが、支援をという言葉がちょっと気になりまして、この推進するためということが続けることができないのか。支援というと誰かが推進しているのを手助けするとういうような形になると思うのですが、やはりこれは、町が中心というか、企画して、基本的にやっていただくと。実際に動くのはいろいろな団体が動くでしょうけれど、おそらくそういう気持ちで支援をという言葉を使っているのだと思うのですが、ここだけが支援という言葉があるのですが、やはり、ここも推進すると、町がちゃんと推進しますと。そのためには、これこれこれいろいろな団体と連携しながらやっていきますというような意味合いで、ここを推進するためということではいけないのかなと。

道津：今のところですね、社協で総合介護ですかね、ちょっと変わったでしょ。そういうときに、一般のかたが要支援1、2になる前に住民の人がそれを支援する、社協や専門のところだけではできない部分があるから、各集落などもそういうかたのサポートできる人を育てるということで、ちょっと具体的にはお金などもちょっとあったので、そのところを給付とありましたので、そこが最低賃金よりも低いではないかということで、町長がその所は変えるということをおっっしやていて、そういうことをするために、支援ということは必要じゃないかなと思います。だから、そのところもちょっと具体的な介護関係のあれに関わってくる、社協さんとはそういうあれが新たに入っていました。

松尾：そういうことであれば、そのあたりをちょっとはつきりさせていただければと思うのですが。

深川：支援の支援みたいになりますね。支援にもいろいろな形がありますが、ちょっと薄い感じがしますね。

川内：行政的な考え方と、政治的な考え方と違うので、行政がやったことを具体化しようというのが政治だと思うのですよ。そこにあまり踏み込みすぎると逆に政治家さんの意味が薄くなるかなという気もするし、ガイドラインでいいのじゃないかなと私は思います。

富吉：文言ひとつひとつにすると、非常にあれだけど、例えば先ほど深川委員が言われた更なるというと、今はじゃあ何かという、そういったことも含めてここをわざわざ更なるを外すだけでもいいのかなと思ったりとかですね。こういう文章の中

で人間の喜怒哀楽というか生の声をちょっと入れると、この文章がずっと町民に入ってくると思うのですね。例えば、18ページの最後の段落で明るい明日を担う子供たちがいきいきと健やかに育つためには親だけでなく、学校、企業、行政、そして地域のすべての人が子育て支援に関わることで、目指しますと書いてあるけれども、健やかに育つところに、例えばですよ、かぎ括弧して「うちの子もよその子もうちの子」というような思いで、親だけでなくとすると、町民全部がうちの子だけでなく、よその子も隣の子もうちの子ぐらいにしないと、社会の宝物である子供たちは育たないというようなことで、ずっと出てきたりするのですね。だから、そういった言葉をちょっと入れたりとすると、こういったある意味では非常に格調高い文章といえ文章が町民の中にずっと入っていくから、子育てというのはよその子もうちの子と同じようにせんといかんとよというようなことに繋がっていくけど、こうやってしていくと何となく文章だけになってしまうのではと思うのですが、文章を作るというのは難しいですが、でも、よくできていると思います、そういったところ考えるといいかなと。

深川：全体的にまとまった文書なので、格好良すぎるのです。もう少し、役所が考えてある文章だなと。もうちょっと、泥臭くとか何と言うか。

川内：さっきの文にしても、おせっかいという言葉ここに入ればいいですよ。おせっかいを通して安心して子育てということで、せつかく前にキーワードが出てきたものですから、ここに入れてもいいんじゃないかなと思います。

福島：18ページの中で、下から6行目に高度医療の充実に努めると同時にということ、高度医療というのは行政が伊万里有田共立病院とかそういったものの充実にするわけですが、かかりつけ医による在宅医療体制の整備というのが書いてありますが、行政がどのような形にしていく、もし行政がするのであれば、もう少しその辺に肉付けがあったほうがいいのかと思います、行政がここまで入り込むのですかね。

木寺：この文言については、伊万里有田共立病院と民間病院との連携というところで、ずっと前から言われているところですが、本年度からの総合事業の中での、体制作りということでも、謳われていたと思っています。おっしゃられたとおり行政として、どのくらいの関わりで推進していくのかという所は、この文書を見ただけでは読めない、そこは検討させていただきたいと思っています。

富吉：かかりつけ医の理解を得てとか協力を得てとかにすれば、要するにかかりつけ医、すぐ近くのお医者さんの理解を得ながら、こうするとなると行政が手をつたむのではなくて、ということになるかと。目指す所は分かっているけど、高度医療機関だけではなくて、やっぱりすぐ常に相談しているお医者さんたちがこうということだから。

福島：この文章だけだったら行政がこういう整備に関わるよと。

木寺：かかりつけ医の方々に対して、指導などをしていくというイメージです。

富吉：理解を得ながらとか、協力を得てとするだけで、一体となるというかね。

原田：確にかかりつけ医を持ちましょうと謳ってあるけれど、そこに協力によりとかにすれば、かかりつけ医さんを表に出したような形になるので、この文章ではちょっと難しいような表現かもしれないと思いますね。

深川：そもそも在宅医療体制というのは、要するに病院にいかなくても自分の家において、ドクターが循環してくれるという制度ですよね。そういう制度をされている病院というのは、有田町にいくつくらいあるのですか。

道津：これからですよ。国がそういうふうにしていこうとしているのです。

富吉：佐賀あたりでは、具体的に言えば、満岡病院とかなんとかが往診だけの医療機関がいくつかできていますね。

深川：有田は一つもないということですか。

岩崎：いずれにしても、この地域包括ケア体制というのをもっと細かく丁寧に書く必要がありますね。図とかがありましたよね。イラスト入りの。あれなんかを中に入れたらどうですか。

木寺：今回、基本構想を定めて、その基本構想を実現していく基本計画を12月までに策定をいくような内容で、この基本構想の中に、どれだけ具体的なものを盛り込んでいくのかというラインがある程度ひかないと、基本計画も基本構想も変わらないような状態になってしまっただけではいけないので、具体的かつ実施していくべき内容については基本計画の中に盛り込んでいこうと考えています。そうは言っても皆さんからいただいているご意見をそのまま文章の中にどんどん加えていくと膨大な量になっていくので、それはできないと思いますが、いただいたご意見を全体的に慮った上で適切な表現で簡潔に表現していかざるを得ないと思っております。ご意見としては、量が多くなるだろうが、そういったことは配慮されなくて結構です。どんどんおっしゃっていただいて、それを最終的にどういった言葉で裏づけとしてこういったものを持って表現したということで、まとめさせていただきたいと考えています。

岩崎：何れ、細部については基本計画の中で示していくということですね。4ページで今は基本目標の部分で、これについても分かりやすくしていかないといけないということですよ。

木寺：18ページ以降に盛り込む内容について、分かりづらいとか注釈がなければ理解してもらえない内容については、注釈を準備しないとイケないですし、注釈をいれないとすると、そういったことが分かるような表現には変えなければいけないと思います。

山口：20ページですが、産業振興・観光となっていますが、最初のひと段落が観光のことを書いてあって、真ん中に産業振興があって、最後にまた観光となっている

ので、これは分けたほうがいいのかないというのが一つあります。3行目の有田焼創業400年事業の遺産（レガシー）とありますが、何となく遺産とかレガシーという言葉のイメージからハード的な感じがするのですが、もちろんハード的なことではなくて、事業の実績も含むのでしょうか、それをもう少し丁寧に説明したほうがいいのかないという感じがします。そのあと次の100年のために住民間の交流をさらに深め、町の一体性を確保することで、食と器が融合したと書いてあり、意味がよく分からなかったのですが、この意味は食と器が融合することなので、農業と陶磁器産業というのがより深く繋がるということだと思うので、住民間の交流としたら、町全体のいろんな人の交流と捉えられてしまうのじゃないかと思うので、もやとせずには農業とやきもの産業というふうに、言ったほうが分かりやすいのかなという気がしました。

川内：遺産というと過去のものになってしまうので、伝統とかにしてくれればいいのかと思うけど。レガシーというと流行かもしれないけど。

深川：20ページの最後の観光を有田町の最も重要な産業の一つとして育成しますと、これは本当に言ってよいのでしょうか。こうなって欲しいと私は思っていますが、現在の状況を見ると、予算も削られたようですね。予算も十分つけていただいて、観光のために。

久家：おもてなしの心を醸成しますと、どなたのおもてなしの心を醸成しようという意味で書かれているのかが分からない。町民全部のおもてなしの心を醸成するとするのか、通年観光に携わる人のおもてなしの心を醸成するかによっても、町の取組が変わってくると思うのですよね。おもてなしの心を醸成することだけで、観光というのが最も重要な産業になるのかということもあるので、何か、おもてなしの心とかいときゃいいやんみたいな感じに見てもとれないので、ここのあたりが最後の段落がよくわからない感じがします。

深川：絵に描いたもちじゃいけないからですね。

福島：上から3行目に観光資源をうちの町は有している。これらの資源を活かした観光産業の振興を図ることが期待されていますとありますが、期待されていますといううちの町の10年先をすると、期待されていますというのはちょっとおかしいかなと。

原田：字句ですが、最初の「食と器でひとが集まり」は、漢字になっているのですが、手前4ページのほうはひらがなになっているのですが、どちらが正しいですか。

志賀：漢字が正しいです。失礼しました。

久家：生活環境基盤とあるのですが、この殆どが自然環境とかに関することが多くて、これから財政的な面で問題になってくるのが、道路や橋とか川のハード面の整備、補修というところが本当に大切になってくると、お金が本当にかかってくるころだと思うのですね。そのあたりが生活基盤の整備とかこれから先、いろいろな

ことがあるから道を新しく作りますよ、整備しますよと見えるのですが、今ある道をどう保全していくかということのほうがよっぽど大切になってくるのではないかと、これから先思うのですよね。水道管であったりとか、橋であったりとか。ダムも橋も渡れないとかいうことについては町内各所で出てきますよね、10年間のうちでは。そういった、今ある道が不便なく使えるというところをどこかに、盛り込まれたほうがこれから先の10年のより具体的な目標になるのではないかなと思います。

木寺：19ページの安全で暮らしやすいという文言の中の長寿命化を進めというところに、すべてを含んだ形にはなっています。道路網の整備と、とありますけどその前の生活基盤の確立というところの長寿命化ということであれば、水道であったり下水道であったり、橋、道、インフラ、そういったものの長寿命化という意味で、端的ではありますが、長寿命化という言葉で表現しているものです。

久家：全体的なことなのですが、すべての文章が長くて、一つの文章に2個も3個も4個も意味を持たせているものがあるので、一つの文に一つの意味とかにさせていただいたほうが、そこがより際立ってきちんと伝わると思います。ここも2つのことが一つの文章に入っているんで、長寿命化というところが薄らいでしまっていて、何の長寿命化なのかというのが良く分からなくなっています。何回か読めば分かるのでしょけれど、もうちょっと短い文章にさせていただくと、ありがたいと思います。

原田：生活基盤としてあるのを、並びにとかにすると変わってくるし、課長は道路や橋梁と言われたけど、ここで見れば道路だけだと。そこを含んでの橋梁と思いますが、ちょっと、道路や橋梁の整備とすればインフラ関係かとは思われるところもでてくるかも分からない。

富吉：さっき言われたのはまさに僕らがいつもしていることで、割とてん（、）でつながりであるけど、これを思い切ってる（。）にしてみると良く分かるということで、例えばこれも安全で暮らしやすいの文章も、長寿化を進め、となっているから薄らいでしまうというのは、まさにそのとおりで、長寿化を進めますとまる（。）で1回きって、これによって日常生活の利便性を図りますと、2つの文章にすると分かりやすい。確かに完璧じゃないから出てくるけど、堂々巡りになるけど、いま皆さんたちが言った意見をちょっとあれして、なるべく文字を切ってしまうとか、すると意外と分かりやすい。

川内：例えば18ページの上から2行目の「り」は次の行についていたりするから、どれだけ修正したのかわからないのがさ。途中だとは思いつつその辺が気になったりしたもので。

木寺：これは単に「り」の後に句点があるから、こうなっているだけです。

今泉：2点申しあげたいと思います。全体において、久家委員や皆さんがおっしゃたよ

うに、ちょっとこれだけ書くのは本当に大変だと思うのですが、ずっと入ってこないところもあるかなと思うところもあって、富吉委員が生声を入れるといいですよと言われたように、住民委員会で結構皆さんの生活に根ざした言葉が結構出ていたと思うのですよ。3回目と4回目を傍聴したのですが、みんな、こんなこと考えているんだと思い、感心するくらい自分の生活に根ざした言葉をおっしゃってたと思うので、そういったものをちょっとずつ入れることができないかなと。そうすると発言した人も「私が言ったことだわ」とかと思ったりするかなと。これも町の人に全部読んでもらいたいという前提で作るわけですよ。せっかくあれだけの住民委員会の発言があったので、あのときの言葉がちょっとずつでも入らないかなと思いました。それから、もう1点は最後のページの文化教育のところですが、ふるさとのこととか本当に有田の子供たちはすごく勉強していて、びっくりするので、これは何も問題がないような気がするのですが、生涯学習というところを考えたときに、せっかく佐賀大学が有田キャンパスということで、作られることをどこかに入れることができないかなと思うのですよね。地方の鹿児島とかいろいろなところでも大学を誘致して地域おこしに活用して、お互い協力をという動きが結構ありますが、佐賀県の中でも唯一の国立大学が有田に来るということは画期的なことではないかなと思うのですよね。それをもうちょっと具体的に一言入ることで、佐賀大学を利用して生涯学習的な〇〇にならないかなと、最後のページで思いました。

岩崎：是非、ここを入れてもらって。今泉委員が言われたように、住民委員会では1回を4時間くらいかけて意見を出しながら、本当に無作為で選ばれた人なのかなと思うくらい、本当に感心してですね、傍聴していたのですが、そういう思いをなるべくいれてもらうようにもう少し努力していただいて、パブリックコメントでも住民委員会のメンバーから、かなりの意見が出てくるのではないかなと期待をしているのですけどね。

富吉：どこかの項目に1カ所はかぎ括弧で自分の言葉が何かに入っているだけでも違っても知れませんか。やっぱり一つの中で、大学がある町というのはものすごく誇りにしていいから、佐賀大学有田キャンパスという言葉だけでもあれば。しかし、作るほうは本当に難しい。それを理解しながらみんなの思いがこういう言葉で。

岩崎：それぞれに出していただいた意見を参考にして、事務局のほうで分かりやすくつくっていただくかなと思いますけど。いづれにしても、基本目標ということで、具体的な所は基本計画、実施計画に挙げられてくると思いますので。

王寺：この「ひとがつながりひとがつどう」とひらがなでずっと点も打たずにというのは何か意図的なものがあるのですか。

岩崎：これは前回もいろいろな意見があつて。ここを空けるということですね。

王寺：ぱっとみたら、ぐるぐるって感じだったので。ひらがなにしたのは子供でも読め

るようと思ったのですが。

岩崎：半角あげましょうか。

木寺：ここに一字のスペースが入ると、4つの言葉に分かれてしまうということがあって。事務局ででてきたのは、このひとつという文字の表し方をひらがなの状態のまままで、ちょっと別な字体というか、大きめだったりひとつというものを際立たせるような表示の仕方はどうかと。そこを半字分あけて、そういった意味合いを持たせていくのかですね。

川内：縦に書けば段落で分けるのですが、横書きだとこうなってしまう。

岩崎：「ここではきものをぬぐ」というのと一緒ですね。時間が迫っているようですが、協は富吉専門委員が見えているので、全体的な総括といたしますか、しばらく講和をお願いします。

富吉：私も初めての出席になりましたが、皆さんの意見を聞いて本当に、私が有田に来たのがちょうど平成元年の春だったのです。今は4月1日が人事異動ですが、私はなぜか3月に来ているのです。まさしく、先代の今右衛門さんが人間国宝になったときで、それから取材を含めて2年間しかいなかったのですけれど、こうやってご縁をいただいて。で、思ったのですが、これをずっと読みながら、観光に力をいれるということもあって、ちょうどそのときふるさと創生資金が1億円ずつ出されたときだったろうと思いますが、有田に来て半年間で、私が住んでいる所はここは景観が違う潟の町なんよね、東与賀というのは、有田って佐賀の町にこんなに山水画にかかれるようなものがあるということで、ふるさと創生資金で東与賀町がどんな町にしたいかという論文募集をしたのですよ。で、僕は有田の町のことを書いたのですよね。いわゆる有田町のことを書いて、東与賀にも森を作ってほしいと。で、干潟の町に森を作るというのはできないかもわからないけど、通りに木を植えてくださいと。そして、例えばハナミズキ通りの右に曲ったら役場があるとか、さざんか通りを通り越すと3つ目に何があるというようなサイン計画ができるみたいな町にしてくださいというようなものを書いて、僕は一席になってですね、賞金20万円をもらいました。やっぱりその町にいと、とても素晴らしいものに気付かないのです。だから、他人の目を入れていいところをもっと伸ばそうということになると、有田はこれだけすでにある資産があるから、それに磨きをかけるという、で、ひとつあるのであれば、今あると思いますが、景観条例やサイン計画をもっと厳しくして、実は有田の町というのは、佐賀の中でも、日本の中でも看板の色や形や大きさにはものすごくこだわっているのだというのが、ここになるのではないかなと。なぜ、こういうことを思うかということ、津和野という町に行ったときに、その観光協会長と話したときに、津和野って漠然としています。行ってみれば何にもないようだけど、その観光協会長さんが言うには、人、観光客というのは町がきれいなだけで来る

のですね。津和野というのは通りに水路みたいなものがある、それをみんなでいつも清掃して、きれいな水が流れている。それだけを見に来るのだというようなことを言われたので、有田の町にどうする方法があるか分からないけれど、例えば、ひょっとしたらたいへんなことかも知れないけれども、看板とか何とかみんなで意見を出し合って、こうしたらいい、統一感を出したりすると、すごく特長があって趣のある町になるのじゃないかなと。そうしてくださいということじゃなくて、一つの何かをなすきっかけとして、そういうこともあるということです。だから、例えば子育てにしても、有田の町というのは、町を歩いている子どもたちを自分の孫のようにみんなが声かけをしたりしているよっということも、とても特長だしですね。そういったことを、考えたらいいかなと。これを見ていたけど、本当に21世紀というのは、環境と人権の世紀だといわれていて、これがちゃんと町民憲章の中に全部入っているなということですね、すごいなと思って見ていましたが、ぜひ第2次のマスタープランがみんなのものになっていく。作っただけで終わりじゃなくて、作ったものが、実は自分たちがしないといけないのがこの部分だねと思うような計画になったらなと思います。皆さんの意見を聞いてとても真剣なところが共感できました。

岩崎：おっしゃったように作ったものがみんなのものにならないと意味をですから。パブリックコメントで1カ月間公表されますので、皆さん方もそれぞれ見ていただいて、その中にコメントをいただいても結構かと思しますので、次回は5月の下旬ですが、そこで最終決定ということで、今日は貴重な意見を出していただいて、文言かれこれですね、読めば読むほどわからなくなりましたが、貴重なヒントもいただいたので、区切り区切りの部分もあるかと思いますが、そういう意見も出していただければなと思います。今日は貴重な意見を拝借して、また、貴重な意見をいただきましたことに感謝しながら、4回目の審議会を終了したいと思います。